—Foreword—

感染症治療を科学する
—PK-PD 理論に基づいた抗菌薬療法—

木 津 純 子,*,a 黒 田 照 夫b

The Scientific Basis of Treatment for Infectious Diseases
—Appropriate Use of Antibacterial Agents Based on PK-PD Theory—

Junko KIZU*,a and Teruo KURODAb

aDepartment of Practical Pharmacy, Keio University Faculty of Pharmacy, 1–5–30 Shibakoen, Minato-ku, Tokyo 105–8512, Japan, and bGraduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, 1–1–1 Tsushima-Naka, Kita-ku, Okayama 700–8530, Japan

本稿は，2010 年 3 月に岡山で実施された日本薬学会第 130 年会でのシンポジウム「感染症治療を科学する　—PK-PD 理論に基づいた抗菌薬療法—」において講演された内容をまとめたものである．

多くの抗菌薬が種々の感染症治療に用いられているが，感染症治療の効率化，耐性菌出現の抑制，安全性の向上などを目的として，抗菌薬の適正使用が重要視されている．特に，近年では，体内動態（Pharmacokinetics; PK）パラメータと，抗菌活性（Pharmacodynamics; PD）パラメータを組み合わせた PK-PD 理論に基づく投与法の設定が推奨されている．日常的に感染症が発生する臨床現場では，薬の専門家である薬剤師の担う役割が大きいが，そのためには感染症・抗菌薬療法に関する適切な知識が必須である．特に，PK-PD 理論を踏まえ，感染症治療をいかに考え，いかに科学的に治療するかが重要となる．

本シンポジウムでは，薬剤師が抗菌薬の適正使用を推進する上で必須となる最新情報を，それぞれの専門を踏まえて 4 名の演者よりわかり易く具体的にご提示頂いた．PK-PD を踏まえた抗菌薬の用法・用量設定に必要な情報から，TDM に基づく抗菌薬の使用方法，実際の感染症現場における抗菌薬使用法，抗菌薬の安全性までの最新の情報と薬剤師の役割についてご講演頂き，それを誌上シンポジウムとしてまとめた．本稿が，感染症治療に係わる薬剤師のさらなる活躍の一助になることを期待したい．

aa慶應義塾大学薬学部実務薬学講座（〒105–8512 東京都港区芝公園 1–5–30），b岡山大学薬学部微生物医薬品開発学講座（〒700–8530 岡山市北区津島中 1–1–1）
*e-mail: kizu-jn@pha.keio.ac.jp
日本薬学会第 130 年会シンポジウム S01 序文